

大和高原の巨石(磐座)伝承

古代の磐座信仰が時代、時代のなかで形を変え、場所を移して今に引き継がれる。

植村勝彌

初回大和高原の西限は三輪山から北へほぼ一直線に春日断層によって春日山、若草山まで、さらに京都府加茂町鹿背山まで延び、大和平野と大和高原を四〇五〇米の高低をつくっている」と記しましたが、この線上の山々すべてに磐座信仰の跡が見られる。つまり古代人から現代に聖なる山として、時代に応じた場所として引き継がれてきた。

三輪山はイワクラ(磐座)学会設立総会の次の日、平成十六年五月十六日登ったので記憶に新しいので覚えていただいていると思うが、まさに古代から聖なる山として信仰されていた。そして、この山麓で何度もの政権交代が行われた。その真相を知っている山である。聖なる山であるがゆえに政権(王権)に利用された。「古事記」「日本書紀」は高天原から神代の国づくり人づくり、皇統の正当性を上手に書き上げているので思い込まされているが。

三輪山信仰、祭祀は先住民が行っていたのを、初期大和政権は先住民の主長(大物主)の命を神として祭り融合、結合、配下として統率したと

言われる。大物主の命は大國主、大國持、大己貴等の神名を持ち天孫に國を譲った神とされる。初代神武天皇皇后五十鈴媛のことを「古事記」は、

勢夜陀多良比売

富登多多良伊須須比売

大物主神

綏靖天皇

神武天皇

日本書紀

玉櫛媛 媛踏躰五十鈴媛

事代主神 神武天皇

踏躰は砂鉄から鉄を作るとき空気を送り込む「ふいご」のことで、五十鈴媛は鉱業集団の長の娘の意と言われる。三輪山の北隣に穴師大兵主神社や穴師坐兵主神社が延喜式神明帳にある。この地域に強大な鉱業集団を統率する豪族の媛が皇后になることで王権の力を増し地域勢力と結合し

たのである。

三輪山には、辺津磐座、中津磐座、奥津磐座、その他の磐座があるが撮影が許されないのが載せることができない。山頂磐座と共に社や寺院を祀るようになってくると山頂にも社が祀られる。おそらく日の神を祀ったと思われる。現在の社は高宮神社で御祭神が日向御子神、俗名上宮神峰社という。延喜式神名帳には神坐日向神社とあり、室町時代古地図には「高峰」と注記されている。

現在は池をつくりその中に南西向きに祀られている。古代は日向かいの太陽神で在り農耕時代を迎えると池の中に祀る雨の恵み、水の神、雨乞いの神にもなった。数拾年前まで旱魃の年は三輪山麓の農村では村中が三輪山頂へ雨乞いに参っていた。つまり、雨乞いの山として崇められていた。周辺の方々が登られるコースは「あし谷」という所を山頂へ上った。

奈良時代から大御輪寺、平等寺、浄願寺が建てられ、六斎日にはおおいにぎわい、門前まち、街道まち

として発展したが、明治の廃仏毀釈で廃寺となつたいま、聖林寺蔵の日本を代表する国宝十一面観音立像や法隆寺宝物館蔵地藏菩薩立像(国宝)などは大御輪寺から移された。

多産業の発展とともに、酒の神であり、土地の神でもあり、そして廃寺された寺院の役割を本来の磐座信仰の山、神山の役割を引き継ぎ、現代に応じた人々の心を支えている。

三輪山の北に巻向川が流れる。その北に連なる山を弓月嶽や痛足の山、引き手の山、羽易の山と万葉集に柿本人麻呂らが歌を詠み、多く残している。

この北に連なる山も古代人が崇めた磐座信仰の聖地であった。大和初期政権は、先住民の地主神「大地主神」をこの聖地に祀った。「日本書紀」では崇神天皇は神威を畏み皇祖天照大神の皇女豊鍬入姫命をして宮中から笠縫邑へ祀り、大地主大神の皇女淳名城入姫命を市磯邑に定め大市長岡岬に祀つたと記す。つまり、新しい王権が先住民の土地神を先住民の聖山に祀り、連携と信頼を深める神威を高めるとともに大きな支え

にした。笠縫邑から倭姫命が諸国を巡つて伊勢、五十鈴川のほとりに祀られたとなつている伊勢神宮とともに大地主大神を祀る神社は国家の庇護を受け栄えた。三二七戸の封戸を受けている。これは全国宇佐八幡、伊勢について三番目である。以後十二社、機内八五座祈雨神祭として国家の重要な神社であり続ける。もちろん延喜式内社で大和坐大国魂神社三座とある。「大日本地略辞書」は淳名城入姫命が兵主社を起し長尾市にいたり大和社を祀つたと。また、「全国式内祭神略記」は元長岳寺北山上にありとする。これは現竜王山の景勝地に祀られていたことになる。いずれにしても大和平野や葛城、河内等を一眺する景勝地に大国魂神を祀り、国を見渡す地は地主神にふさわしい位置であった。

古墳を築く時期後期、竜王山山頂近くに大型の横穴式石室のある古墳をはじめ西斜面から谷間にかけて六〇〇〜七〇〇基が六世紀後半〜七世紀後半(八世紀追葬まで)に奈良県最大の後期群集墳として貴重な古墳群

が築かれた。

中世、十市氏が山城を築いたとき山頂から尾根にかけ郭、土塁、畷堀、空堀、切堀、矢倉台の施設をつくつていたので古代の磐座は残っていない。竜王山という名は山頂近くに雨の神竜王社三社が祀られていること

からの名である。

ところで、話を磐座の聖地に祀られた大和神社に話を戻す。中右記(藤原宗忠、中御門右大臣の日記)に永久六年二月九日(一一一八年)火災のため三殿(神体焼亡と書かれているので全焼してしまった)。

そこで高槻山に遷され、再に中山に移され貞享の頃(一六八四〜八八年)現在地(新白水)に祀られた。二度目の高槻山祀地跡には大きな石が置かれていて、大和神社祭礼のときは長岳寺の僧が神饌を供えてから中山のお旅所へ向つていったと言われているので山麓の村々の古老を訪ね歩いて聞き取り調査したが、場所を知る手がかりを得る事が出来なかつた。また、落葉が終わる晩秋、尾根を歩いて調べてみようと思つている磐座を発見したときは報告の記事を載せませす。

平安末期皇室の力も弱まり大和国は興福寺の荘園化、興福寺が守護の時代を迎え大和神社は衰退した。戦国時代なら興福寺多聞院英俊は「多聞院日記」の天文十一年(一五四二年)の記事に大和神社のことを



「目もあてられぬあさましき為体」と書いている。その衰退ぶりがわかる。江戸時代貞享の頃現在地に移され、神宮寺（南之坊、北之坊）と共に水利系を共にする九ヶ村地域の郷社として農村社会に受け入れられ信仰と結束を確認しあう場所、社となった。そして大和国で一番早い四月一日「チャンチャン祭り」が盛大に行われている。

第二次大戦の戦艦「大和」に大和神社の分霊が祀られていた。そして昭和廿年四月艦はアメリカの攻撃を受け沈んだ。艦と運命をともにした二、七二七柱と巡洋艦などの英霊三、七二二柱が末社祖霊社に祀られている。

また、竜王山へ早魃の年は、山麓の村々が松明を持って「雨たんもれ雨たんもれ」と唱えながら山頂をめざした。大和平野からその眺めは木々の間を登って行く、見えたり隠れたりする様子が幻想的で「人玉」がふわふわ飛んでいるように見えたであろう。「戦国時代竜王山城で戦い死んでいった兵士たちの霊が火の玉となり飛んでいるんだと語られ

「ジャンジャン火」伝承がうまれた。古代の磐座信仰が時代、時代のなかで形を変え、場所を移して今に引き継がれ、立派にその役割を果たしている。

更に春日断層を北へ、竜王山の北側で布留川と高瀬川のあいだに大国見山（四九九、五米）がある。四、五十年の昔までは、滝本、岩屋地域の「雨乞いの山」「嵩登りの山」であった。

桃尾の滝で一休み。滝は古から心癒される観光地であった。そこから



登ること小一時間。まわりがひらけ大和平野一望の山である。山頂には大小の石がゴロゴロしていて、磐座である。途中にも磐座らしきところが何ヶ所かある。

今は山頂に竜王社が祀られていて北側数米の所に竜王池がある。早魃の年滝本、岩屋地区の雨乞い行事行われ「雨たんもれ雨たんもれ」と唱えて池の水を青葉でかけ酒を供えてもってきた松明で「大とんど」をして雨の恵みを祈願したそうだ。この山頂から東へ山の峰筋を進むと布留川の源流地の巨石群（磐座）八ッ岩へ通じる。

山頂に油穴という石の穴がある。ノロシ（烽火）をして伝達したと伝えられている。縄文、弥生遺跡は発見されていないが七世紀末に義淵によって西側中腹に竜福寺が建立された。（行基説もある）義淵は竜蓋寺（岡寺。竜を前の池に蓋をして封じ込んだことからその寺名）竜門寺を建立し奈良時代の高僧、行基、良弁、玄昉などの師である。そして真言密教や山岳信仰、修行の場として栄えた。下の方が春日断層の落差を流れ



落ちる桃尾の滝である。落差二十三米。竜福寺は東西十丁南北六丁、十六坊の子院（塔頭）があった。江戸時代の朱印領地百石。しかし、明治の廃寺ですべて取り払われた。

大和名所図會は、桃尾山龍福寺、布留山の北にあり、行基菩薩の開基にして古は伽藍嚴重たり。今、頽廢して僅かに存せり。本堂に十一面觀音を安ず。傍らに阿弥陀堂、十二所権現、春日祠あり。是、鎮守の神なり。その傍らに鐘樓ありて、子院僧坊十六所ありとぞ。と記されている。

また布留瀧（桃尾の滝）については次のように記す。桃尾山にあり。桃尾瀧ともいふ。翠巒峩々として飛白水三反ばかり。白虹雲を穿つて瀉ぎ、寒聲月を誘うて走る。絶景窮無うとして口山の銀河三千尺ともいひつべし。「続拾遺」「いまも又行きても見ばや石上ふるの瀧つせ跡をたずねて」後嵯峨院と載せている。

滝は、修行、不動信仰、納涼の觀光の場となった。室町時代の初め伊行末の子孫、伊行経によつて刻まれた不動明王磨崖仏や如意輪觀音石仏があり石仏愛好者を楽しませ、滝の雰囲氣をもちあげている。

現在は、納涼の滝として觀光地としてハイキングを楽しむ大國見山ハイキングコースとして親しまれ引き継がれている。